
導かれる神々

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
導かれる神々

【Nコード】
N2334T

【作者名】
RAN

【あらすじ】
世界の要素を司る神々の世代交代の時期が迫っていた。
名と言葉を司る神の子供のミコトは、神々の子供を探し出す命を受ける。
だが、過去の幻影が彼の背後でうごめきだし、彼もまた変化していく。

サイト、dノベ転載

- ROAD OF THE GODS - < O >

俺が住む世界は、人間が神々を信じ、神々も人間との関わりをもっている世界だ。

人間は、神は永遠を生きると信じているようだが、一部例外を除いて、神にも寿命はある。

だから、神は子供を作り、その子供に自分の役割を受け継がせる。だが、その子供は、神として最適な人物となるため、人間界で、孤児として生活している。

しかし、俺の場合は違う。

俺は、人間界に降りた神々の子供を探して、集めるという役割があつたため、親父 名と言葉の神のネード神と、母さん 美と真嘘の女神のフラウ神と共に神の世界に住んでいた。

本当は、神に血のつながりはない。

血のつながりがあるとすれば、俺と同じ属性をもつ親父だ。

母さんには直接の血のつながりはない。

子供とは、そもそも神が産むのではなく、神が造るからだ。

だから、それぞれの神にそれぞれの子供がいる。

なぜ俺には母さんがいるかというと、これはパートナーの関係だからだ。

だから、二人は惹かれあい、一緒にいる。

俺一人だけが神の世界にいるため、親父の側にいれば自然と母さんがいるため、俺にとっては母さんとなっているのだ。

本当なら、父も母も神の子供にはない。

あるのは、自分と、自分を造った神の存在だけ。あとは、位の高い二人の神だけがもつ精霊。

そして、時はたち、神の子供達は皆それぞれ、色々なことを判断ができる年齢になったため、俺に命令が下された。

だから俺は、昔からずつと一緒にいた、同じものを司る精霊のレシカと、自分の肉体を造り、地上へ降りたのだ。

位の一番高い神のネード神と、それとは別格の存在であるフラウ神には、生まれた時から一緒にいる精霊がいる。親にも子供にも。

なぜフラウ神に精霊がいるかはわからないが、フラウ神は「リレイズ（切り札という意味）」と呼ばれている。

俺にはなぜこんな風と呼ばれ、精霊がついているのかはわからないが、たぶん、フラウ神は元からネード神とパートナーと決まっているためからののか、別格の存在となっっているようだ。

だが、俺にはどうしてもそれだけではいまいように思えてならなかった。

しかし、今の俺にはその理由が見当もつかなかった。

そして、精霊は高位の神にしかつかないが、親父とお袋と一緒になったように、惹かれあう属性のパートナーが神にはいる。

惹かれあう属性同士の神々の子供だ。お互いになくってはならない存在。

必ず一人の子供には一人のパートナーの神の子供がいる。

それは、最初から決められている運命だった。

そして、神々の子供が、能力に目覚めることができず、人間界での肉体が消滅してしまえば、同時に、精神体もまだ未熟なために消滅する。

つまり、本当の「死」だ。

だが、それで計画が滞ることはない。また新しい神の子供が作られるだけだ。

それもまた、決められた運命。

俺は、そんな運命は嫌だった。

そう、この永遠に廻り続ける神々の運命が嫌だったんだ。
俺はそんな運命は受け入れないと、思っていた。

そう、あの時まででは…。

その頃、ミコトとレンカはある街に来ていた。

その街は、あまり環境が良いとは言えない状態だったため、レンカはあからさまに顔をしかめていた。

彼女は思ったことを素直に表す性格なのだ。

「ホントにここに神の子供がいるの？」

声も不機嫌全開である。

ミコトはレンカのその態度に気分を害したようで、こちらも不機嫌に顔を歪めて言った。

「俺がそう感じ取ったんだから、それに頼るしかないだろう」

「まあ、そうなんだけど…。なんか、イマイチ信用しきれないのよねえ」

自分の能力を疑われたうえに、その語尾を変にのばした喋り方が、さらにミコトの神経を逆撫でした。

が、彼はここでケンカをしても仕様がなれないと思い、気分を変えようと、次の言葉を言った。

「とりあえず、今まではそれでなんとかなってるんだから……」

その時、ミコトの世界が急変した。

全ての音が聞こえなくなり、視界は色をなくした。

ある部分を除いては。

「ミコト、どうしたの？」

ミコトがある一点を見たまま、ピクリとも動かないので、レンカは不審な顔をして聞いた。

ミコトはハツと我に返り、レンカの方を見て、少しの時も惜しむように、早口でまくし立てた。

「アレだ！ きっと今のが神の子供だ！」

そう言うと、彼はすぐに見つめていた方へ駆け出した。

「あ！ ちょっと待ってよ！ ……なんなのよ、もう！」

レンカは状況がよく飲み込めないまま、ミコトの後を追った。

それからしばらく走って、ミコトはようやく探していた「少女」に追いつく。

そして、ミコトは少女の手を強く握った。

「あの、ちょっと、すみません！」

彼の言葉は、息切れでとぎれとぎれになっていた。

少女は驚いた表情と、迷惑そうな表情を一緒にしたような顔をして、ミコトの方を振り向いた。

一緒にいた黒髪を短くした男は、無表情でミコトを見ている。

ミコトはそのまま、息切れを抑えようともしないまま、勢いよく口から言葉を発した。

「俺と一緒にきてください！」

今、ミコト達は宿屋にいた。

ミコトが町中で見つけた少女と話をするため、宿を取り、場をもつけたのだ。

フラウ神の子供である少女　レリエアと、一緒にいた、フラウ神のお付きの精霊であるデノンも共にいる。

神々の子供は、人間のいる世界に落とされると、皆名前を持たない孤児として生まれる。

だから、ミコトに会うまでに名前がなければ、彼が名の神の力によつて名をつけるのだ。

レリエアの名も、彼が名づけた。

とりあえずそこまでの流れは、デノンの計らいもあって進んだが、まだ彼女はミコト達を警戒の目で見つめている。

特にいきなり声をかけてきたミコトには、不信感たっぷりなようだ。

まあ、いきなり信用しろって方が無理な話か。

ミコトは神のいる世界で育ってきたから、それが当たり前だが、それ以外の神の子供は、普通に人間として暮らしていたのだ。

それをいきなり神の子供だ、などと言われたって納得できるはずがない。

ただ、ミコトは嫌というほど感じているが、運命には逆らえない。どんなに頭で理解できなくても、体は覚えていて、いずれ精神はそれについてくる。

そんなものと受け入れることができるようになるのだ。

だから、今理解してもらわなくても彼は困らなかつた。

どんなに嫌がろうと、運命はついて回る。
それに、ミコトとレリエアはパートナー同士である。
彼らは絶対に離れることができないのだった。
神であるのに、運命に縛られるなんて、なんという皮肉だろう、
と彼は何度思ったか知れない。

だが、今はそんなことを言っている時ではない。
いずれ、ミコトは自分なりの答えをこの旅の果てに見ることができると信じて、今はその運命を甘んじて受ける。

「まあ、いきなり信じていう方が無理だとは思っ
とりあえず、今夜はここに泊まって、デノンとじっくり話をし
ほしい」

そして、らちがあかないと察したミコトは、デノンにあとは頼む
ことにした。

デノンはミコトの言葉に静かにうなずくと、何も言わずにレリエ
アの腕を取り、あてがわれた部屋へ向かうことをうながす。

レリエアはミコトとデノンを交互に見た後、デノンの言葉におと
なしく従った。

二人が部屋に消えるのを確認すると、レンカは口を開いた。

「あなたの神様リーダーもすごいもんね。……それとも、パートナ
ーだから？」

レンカが冷めた口調で言う。

最初は気になっていたが、それも彼女の性格なのだとわかると、
ミコトは慣れてきた。

だから、受け答えも自然とできるようになった。
「たぶん、パートナーだからじゃないか。」

まあ、まだ始まったばかりだから他に見つけた時どうなるかわか
らないが、なんだかそういうのとは違う気がするから」

レンカは手元にある紅茶をスプーンでクルクルとかき回しながら

話す。

その目線も手元の紅茶に向けられてはいるが、どこか遠くを見て
いるようだ。

「うん、たぶんパートナーだからでしょう。前ネード神もそんな感
じだった」

前ネード神とはミコトの親神にあたる神のことだ。

レンカは、見た目は若いが、実はかなりの場数を踏んだベテラン
精霊である。

全てをまとめあげる名と言葉の神付きの精霊は、神が生まれたそ
の瞬間から共にあるからだ。

「そうか……」

「あんたは未だに迷ってるみたいだけど、なるようになるから、考
える前に行動しなさい。

あたし、そういうの嫌いなよね。ってか、あんた頭良くないん
だから考えたって無駄よ」

「……………」

まったく、どうしてこいつはこうも口が悪いんだ？

ミコトはレンカを睨みつけたものの、言い返す言葉はなかった。

「……………お言葉に甘えて、俺は部屋に行くよ」

強がっているのが明らかにわかる口調で、彼は、レリエア達にあ
てがわれた部屋の隣に入った。

レンカは、相変わらず紅茶に視線を向けながら、何かを見つめて
いるようだった。

ミコトは、部屋に戻ったものの、寝つけなかった。

そして、宿屋の屋根の上に上り、何をするでもなく、ただ夜空を

見上げていた。

なんだって、こんなにも落ち着かないんだ……。

彼は、人間の住む世界に降り立ってから、言いようのない気持ちを抱えていた。

とりあえず、その気持ちはいいものではない。

何か、悪い予感や胸騒ぎにも似ているような。

何か、あるんだろうか……。

その不安が、彼を眠りにつかせず、悩ませていた。

「おい」

ふと、下の方から聞き覚えのある声があった。

聞き覚えがあるなんて程度のものじゃない。

少ししか聞いていないが、ミコトにとっては忘れられない声だ。

ミコトは驚いて、あわててあお向けの体を起こし、下の方を見た。そこには、屋根の下の部屋から顔をのぞかせているレリエアがいた。

「え、レ、レリエア？」

ミコトは動揺して、うまく口が動かない。

まさか声をかけてくるとは思わなかったからだ。

レリエアはそんなミコトに構わずに、屋根に上ってきた。

ミコトは驚いたものの、レリエアが登るのを助けた。

レリエアが上り終えると、ミコトは口を開いた。

「何をしてるんだ！ あぶないじゃないか！」

ミコトは自分でも驚くほど大きな声でレリエアを怒鳴っていた。レリエアも、ミコトの声に驚き、目を丸くしている。

ミコトは気まづくなり、視線を下にはずし、小さな声になった。やはりまだ「パートナー」というものには慣れない。

さっき会ったばかりなのに、もう大事な存在になっている。運命の力をつくづく感じる。

「……いや、すまない、大きな声をだして。ただ、俺は心配だっただけで、その、別に……」

ミコトの最後の言葉はかすれて消えた。

「お前がそこにいたいのかと思ったから。

別に、屋根に登るのには慣れているのだが。心配させたのなら謝る」

レリエアは、多少困惑の色をその顔にうかべながらも、答えを返した。

彼女は愛想はないが、ただ不器用なだけなのだと、デノンは言っていた。

そんな彼女に、また愛しさを感じ、ミコトは自然と顔をほころばせる。

「ああ、いいんだ、気にしないでくれ。……それより、どうしたんだ？」

やっとミコトはレリエアに視線を合わせて問うた。

今度はレリエアが視線をはずして、どう言おうか困っていた。

「えーと、とりあえずデノンと色々話をして、納得できたわけじゃないが、お前を信用することにした」

ミコトはそうか、と柔らかく笑んだままうなずいた。

その目は、遠い空を見ていた。

「パートナー」というものには慣れないが、悪くないかもしれ
ない、と少しミコトは思い始めていた。

あなたの気持ち、ちょっとわかったよ、親父。

少しのことで心が温まるからだ。

レリエアの温かい言葉一つだけで嬉しくなれる。

「それじゃあ、さっそく明日にはこの町を発つよ。

さあ、寒いからもう中に入って、明日のために寝ようか、レリエ
ア」

ミコトは、そう言ってレリエアの手を取った。

彼女の名前を口にする 것도、その手を取ることも、全てがミコ
トには特別なことになっていた。

だが、レリエアはそんなミコトの手をつかんで、その場に引き止
める。

ミコトは止まり、レリエアの方を振り返った。

「何か気になることがあるんじゃないのか？」

ミコトは一瞬顔を強張らせたが、すぐに笑顔に戻る。

言い知れない不安は変わらないが、今はレリエアの言葉だけで救
われている自分がいる。

「……あった。けど、とりあえずいいんだ」

「は？」

ミコトの言葉に、レリエアは思わず素っ頓狂な声をあげてしまっ
た。

「そう、とりあえず今はいい。はっきりしないことを考えてたって
しょうがないから。だから、気にしなくていいんだ」

レリエアははぐらかされたと感じたのか、宿屋でテーブルに着い
た時と同じような、眉根を寄せた納得のいっではない顔をしていた。

ミコトは、そんなレリエアがかわいくて、ついつい笑みがこぼれてしまう。

レリエアは馬鹿にされてると感じ、少しイラつきの色が見えてきた。

ミコトはあわてて言い訳をする。

「別にごまかしてるわけじゃない。それは誤解しないでくれ。」

俺もなんて言っただけじゃないかわからないだけなんだ。

それがはつきりしたら、みんなに相談にのってもらおうと思ってるんだよ。」

ミコトのその言葉には、誠意がこめられていた。

言葉の神である彼の言葉にこめられた思いは、何よりも伝わる。

レリエアもそれを感じ取り、とりあえず機嫌を直したようだ。

「……そうか。ならいいんだ。何かあったら、遠慮なく言ってくれ。」

これから私達は仲間なんだからな。」

「仲間」 その言葉が嬉しくて、ミコトは目を細め、心の中で反芻した。

「ありがとう。これからよろしく頼むよ、レリエア。」

「いちからこそ、ミコト。」

初めてレリエアがミコトの名を呼んだ。

ミコトは嬉しくて、彼女に抱きつきたいぐらいだったが、手を強く握るだけになんとか抑えた。

そして彼らは、部屋に戻って眠りについた。

その日だけは、ミコトも安らかに眠ることができた。

早く……早く……早く来い……

誰だ……？

早く……早く……でない、お前の大事なものが消えるぞ……

お前は誰なんだ！

……知りたくば、早く来い……

ミコトは勢いよく上体を起こし、自分のいる場所を確かめると、深くため息をつき、顔を手で覆って、しばらくそのままだった。

彼は今、あの村の周りにあった森の中にいる。

これで、数えて二回目だった。

その声はどこか聞き覚えがあるが、思い出すことを拒否するかのように、感覚だけが残り、記憶が蘇ってこない。

それが、ますますミコトを苦しめていた。

この森は意外と広く、ここでの野宿は二回目だった。

つまり、森に入ってからずっと、同じ夢を見ているということなのだ。

神の世界にだけ存在する糸で作られた、濡れない不思議な布のおかげで、服が濡れずにはすんでいるが、やはり寝づらい。

この夢見の悪さと重なって、彼の朝の気分をひどく悪いものにしていった。

……。……。……。これをどうにかするためにも、早く、原因を探らなければ……。

そして、感覚がだんだん目覚めてきたのか、いつものように、大量の汗の感覚が伝わってきた。

あの夢の後はいつもこうだ。

不快感をぬぐうため、服を乾かそうと思い、上に着ている物を脱いで、木の枝につるした。

すると、背後で人が動く気配がした。誰か目が覚めたのだろうか。ミコトが何気なく振り向くと、レリエアがミコトをじーっと見ていた。

「……うわ、レ、レレ、レリエア?!」

ミコトは思わず先ほどかぶっていた布で体を隠してしまった。

「ミコトったら、いきなり服を脱ぐなんて欲求不満なの?」

聞き覚えのある、嫌味つたらしい女の声が聞こえた。

ミコトは自分の左側を向き、顔をひきつらせながら言い放った。

「あのなあ、俺は汗かいたから、服乾かそうとしただけだつーの。なんでそこで欲求不満だかなんだかでてくんた。意味わかんねえよ」

正しい発言ではあるが、声が震えていて説得力がない。

声の主　レンカはニヤニヤ笑ったままだ。

「それにしたつてさー、女の子がいる前で服脱ぐヤツがある?」

もうレリエアだつて呆れて物も言えないよね?」

「え、私は……」

「そう、そうよねー。そんなデリカシーのない男信じられないわよねー」

レリエアの上を覆って、レンカはなおも言い募る。

ミコトはその言葉に少なからずショックを受けているようだ。

レリエアのこととなると、冷静さを見失ってしまうため、レンカ

の一人芝居を見抜けないのだ。

「……だけど、まだみんな起きないと思ったんだ。

……まあ、悪かったよ。ちよつと水のある場所がないか探してくる」

ミコトは先程より声を小さくしながら言い訳するが、結局はレンカの言葉に負け、素直にこの場を辞することにした。

「んじゃ、飯の支度は任せたぞ。それぐらいの水はあるだろ」

「ばつちりよ。早くいつてらっしゃーい」

レンカは明るく返事をして、ミコトをしつしと追い払うように送り出す。

その声を聞くと、ミコトは森の奥に行ってしまった。

レリエアは、心配そうにミコトの背を見送り、レンカとデノンを交互に見る。

「私は別に気にしてなかったのだが。あれはよかったのか？」

レンカが、そのレリエアの肩に手を置いて、優しく話し掛けた。

「レリエア、気にしなくていいのよ。」

ミコトは自らの意志で水を探しに行つたんだから、素直に好意に甘えましょー」

「お前がそうするように仕向けたんだろー」

デノンがそう口をはさむと、レンカはむつと唇を尖らせてデノンを睨んだ。

「うっさいわねー。水探しに行くのとかめんどいのよ。」

それなら、率先してやってくれる誰かがいればいいじゃないの。頭は使わないとねー」

「まあ、別にそれをとやかく言うつもりはない。

とりあえず、ミコトが戻ってくるまでに食事の準備をしておこう。それぐらいはするんだろ、レンカ」

デノンもフラウ神のお付の精霊としての経験は長い。

レンカと同じぐらいといえるだろう。

だから、レンカとデノンの付き合いは実は長かったりする。

初対面から、この二人の性格はかみ合わなかったが、そこがまた互いの欠点を補ってよかったのかもしれない。

レンカは意地っ張りだが、デノンは譲歩を知っているので、それもうまくいっている要因ともいえる。

だから、今のこのようなやり取りもあるのだ。

レンカも、昔からの古馴染みには頭があがらないようだ。

「あつたりまえよ。あたしもそこまで楽しそうなんて思っていないわよ。一応ネード神を見守る役目があるんだから」

そう言っていると、レンカは懐から赤く光る丸い玉を取り出した。

それはラグスと呼ばれるもので、異次元にもうけられた空間に物を入れることができる代物なのだ。

あまり多くの荷物を持ち歩けない旅人がよく使っているものである。

レンカはその玉の中に手をいれ抜き出すと、その手にはラスクが握られていた。

そして、次々と料理に必要な材料を取り出ししていく。

そして、彼らは朝食の準備に取り掛かった。

その頃、ミコトは、水の気配を感じ取り、その方向に向かっていった。

レンカは過去に水に嫌な思い出があるらしく、水の気配を感じ取るのが苦手だ。

だから、ミコトに水を探すのを促そうとしたのだろう。

後から考えればそう思える。今となってはどうでもいいことだが、それに、水があるのなら、せつかくだから汗を流したいとも考え

ていた。

後で言ったら、特にレンカは文句を言いそうだが、それも役得、
というものだろう。

それからまもなく、ミコトは湖を見つけた。

その湖の所だけ開けており、湖が輝いて見えた。

それは、自分がいた神の住む世界を思い起こさせた。懐かしくも
切ない思いが胸に沸きあがる。

その思いは突然に消えた。ミコトは何かの気配を感じたのだ。

辺りを見回すと、影が見えた。光でその人物がよく見えない。

だが、ミコトは、一瞬でその影の主が普通の人間ではないことに
気づいた。

その人物は、神だった。

神の子供ではなく、神だった。

だいたいの神は、神の子供を生み出すことによって世代交代を行
うが、理の中には例外も存在する。

その例外を認められるのは、永久不変を必要とする要素を司るも
の。

愛と、時。

それらの神は自分の思うままに行動し、全てが謎に包まれている。

その影はこちらに近づいてきて、姿をやっと確認するぐらいの距
離に近づいた。

まず目に入るのは、鋭く輝く銀の肩に落ちる長い髪。

そして、深い海を思わせる濃い青い瞳がミコトを見つめていた。

ミコトは、その目に射ぬかれ、言葉が出なかった。

こんなに近くまで来なければ、神の気配に気がつかなかったなんて、どうしたことだろうか。

それとも

「突然のことで、驚かせてしまつてすまない。

察しのとおり、私はある事情により気配を消していた。

だからお前が気配を感じ取ることができなかったのだよ」

目の前の人物は、ミコトの考えを読んだように答えた。いや、実際に考えを察したのか。

上級の神には、容易いことなのだろうか。

ミコトの不信感は募る一方だった。

「私は時を司るタイル神のリューシ。覚えておいてくれ」

そう言つて、リューシは笑顔でミコトの手を握る。

ミコトは慌てて、手を握り返す。

「え、ええ。よろしくお願ひします……」

ただただ圧倒されて、ミコトは言葉が出ない。

彼は他の神とは何か違う。後ろにあるものが、重かった。

その重さは彼の威圧感となつて、全てのものを従わせるほどの力を感じた。

だがミコトは、そんな彼から言われた次の言葉に、困惑することになる。

「それで、また突然ですまないが、私がこうして気配を消しているのには訳がある。

君達の力を貸してほしい。私の話を聞いてもらえないだろうか」

朝食はもうすでにできていた。

レリエア達は、ミコトが連れてきた見慣れない人物に、表情が強張る。

「ミコト……その人は？」

初めにミコトに気づいたレリエアが問う。

ミコトはその視線を居心地悪く思いながら説明する。

「この人は、時を司るタイル神のリューシさんだそうだ。ちょっと気になる話を聞いたから連れてきたんだ。詳しくは、リューシさんに話してもらおう」

「レンカ、デノン初めてではないよな」

リューシはレンカとデノンに軽く目を向け、確認するように言った。

「……そうですね」

デノンは気まずげに視線をリューシからそらして答えた。

レンカは不機嫌そうに顔を歪めて、リューシの方を見ようともしない。

レリエアは、その二人の様子に、不安げな瞳をミコトに向けた。

ミコトは、どうしようもない、と言いたげに肩をすくめてみせた。

リューシは気にした様子はないが、レリエアはいたたまれず、手近にあった朝食用のパン一切れを差し出す。

「……とりあえず、朝食でも食べながらお話しませんか？」

リューシは一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに笑顔に変わる。

「ああ、それはありがたい」

ミコトはすっかり仕事は果たして、水をくんできていた。

それを使って朝食を作り、ミコト達五人は、輪になって朝食を取り

始めた。

じゃがいもをすりつぶして作られたスープと、乾パン。輪の真ん中に葉物の野菜がもられた大きな皿がある。

野菜は、森に入る前にいた村で調達してきたものだ。

ラグスに入れておけば、ある程度新鮮さが保てる。ラグスの中では時間が流れていないからだ。永遠に、というわけにはいかないが、そうして並べられた料理を、それぞれ静かに手をつけ始める。

妙に重い沈黙が流れた。

レリエアはまたミコトをじーつと見る。どうにかしろ、とその目は訴えていた。

ミコトはリユーシに、なんとなく逆らえない気迫を感じていて、あまり口出しのようなことはしたくなかったのだが、レリエアにはかなわない。

「……リユーシさん……そろそろお話してもらえませんか」

ミコトは恐る恐る、隣のリユーシに目をやって言った。

リユーシは、スープを一口飲むと「ああ、そうだったな」と答えて、スープの皿を下に置いた。

もしかして、この人は朝食に気を取られていたのか？

なんか偉そうな神様っぽいけど、実はひもじい人なのか？

ミコトは様々な思いが胸で渦巻くのを感じていた。

リユーシはミコトの様子など意に介さず、話し始めた。

「すでに森に入って異変を感じているかもしれんが、この森でどうも怪しげな儀式が行われようとしている。最近人間の間で流行り始めた宗教のようなのだが、どうもきなくさい。だいたい、こんな人里離れた森で、大勢が集まって何かしているというのも怪しい。調べようとしたのだが、彼らは徹底した秘密主義のようで、外にも情報が出ないや、中に入ることもできなかった。人間が何を信仰するかに私は干渉するつもりはないが、物騒なものは話が別だ。で、お前らに協力を頼もうと思いい、こうして来たわけなのだ」

ミコトはレリエア、レンカ、デノンの順に見る。許可を求めている

るのだ。

三人はその視線に気づき、ミコトにうなずく。協力しようということだ。

これで全員一致だ。命は力強く微笑んで、リユーシに言った。

「OKだ。俺達の方も、そちらの方が都合がいい。心強いかぎりだ」

そして、彼等は朝食を終え、すぐに気を探りながら森を進み始めた。

それから、あまり時間がたたずに古城に着いた。もう、遠い昔に滅びたようで、あちこち壁がくずれて、人がいる気配はない。

だが、ここから神の子供の気を感じることができたので、一同は緊張しながら城の中に入っていった。

玄関から入って、しばらく一直線の廊下を歩くと、大広間に出た。

そこには、誰かがいた。神の子供の気配がする。

しかし、それよりも大きい存在の気配もした。

その気配に、ミコトは不安を覚える。

「何か感じるだろう、ネード神の子供よ」

リユーシが声をかける。

ミコトは思わず驚いて大きく震えてしまった。

ミコトはそれが恥ずかしく、何とかバレないように素知らぬふりをしたが、とりあえずリユーシにはバレてしまっていることは、その表情からわかった。

ミコトは悔しい気持ちを抑え、何とか平静を装って答える。

「そうだな。だが気配が大きすぎてよくわからない。何かある、とぐらいにしか認識できない」

「俺も同じだ。とりあえず、つながる道に進むしかないようだな」

皆はまっすぐ伸びる目の前の道を見た。

大きい気配のせいで、他の者の気配が全く読み取れない。

要するに、何が起こるか全く予測不可能だ。

人間としては当たり前のことかもしれないが、神の子供として能力の訓練を受け、過ごしてきたミコトにとってはとても不安なことだった。

しかし、とりあえずは、この広く薄暗い道を進むしかないようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2334t/>

導かれる神々

2011年8月18日03時18分発行